

若手難民研究者奨励賞成果論文

# 未承認国家ソマリランドとディアスポラ

## 越境的に展開されるダイナミズムを捉える試み

須永修枝 東京大学大学院（国際社会学）

### key words

ソマリランド、ディアスポラ、越境／Somaliland, diaspora, transnational dynamism

---

## 1. はじめに

アフリカ東部、通称「アフリカの角」に位置するソマリランド共和国（the Republic of Somaliland：以下、ソマリランド）は、1991年に他のソマリア地域からの独立を宣言する前の1980年代末に、激しい紛争の舞台となり、多くの人々が難民となった。人口についての正確な統計資料はないものの、ソマリランド政府によれば人口約350万人に対して15万人から20万人程が同国の外側に滞在していると言われている<sup>1</sup>。本稿は、彼らをディアスポラと呼び、ソマリランドの開発や政治が越境的に展開されていることに注目する<sup>2</sup>。

現在、ディアスポラによるソマリランドへの送金は同国にとって主要な外貨供給源となっている。またソマリランド政府が、社会、経済、技術、政治的發展における彼らの役割を重視し、2010年に専門機関（Somaliland Diaspora Agency：以下、SDA）を設置して、あらゆる分野において彼らの貢献を促そうとしていることから、ソマリランドにとってディアスポラの存在が重要であると考えられる。加えて、同国が国際的には主権国家として認められていない未承認国家（unrecognized states）であることを鑑みると、その重要性はさらに高まり、彼らの動向には十分に目を向ける必要があると言えよう。しかし、ソマリランドの発展について論じている従来の研究は、もっぱらソマリランドの「国内」のみに目を向け、なかでもクラン（氏族）長老の役割に焦点を当ててきた。それゆえ、既存の研究はディアスポラの動向を捉えることができていない。

したがって、本稿はソマリランドの「国外」に着目し、ディアスポラの動向を考察の対象とすることにより、従来の研究では見落とされてきた越境的なダイナミズムを、筆者が行った調査結果をもとにしながら示すことを試みる。本稿はソマリランドの発展においてクラン長老の果たす役割を否定するものではないが、上記のようなディアスポラの重要性を考慮すると、国内にいるクラン長老のみに焦点を当てることは必ずしも当然視できるものではないと思われる。

本稿の構成は次の通りである。まず、ソマリランドの外側に人々が滞在している背景として、1980年代末の紛争から1991年の独立宣言までの流れを概観し、その後に既存の研究に対する本論の位置付けを示す。次に、考察の部分ではソマリランドの開発や政治、さらに人々の統一を図ろうとするディアスポラの活動について、筆者が2013年11月から12月にかけての1カ月半の間、ロンドンにて行った調査結果をもとに議論を進める。そして最後に、本論の議論を総括し、今後の研究課題について述べることにする。

## 2. 背景

### (1) ソマリランドの発足とディアスポラ

ソマリランドが1991年5月18日に独立を宣言する以前、この地域は1960年に旧イタリア植民地ソマリアと合併してソマリア共和国 (the Somali Republic: 以下、ソマリア) という一つの国家の一部であった。そこでは、旧イタリア領がソマリア南部地域を、現在のソマリランドに該当する旧イギリス領ソマリランドがソマリア北部地域を占めていた<sup>3</sup>。なお、両地域ともに人口の大半はソマリ人 (Somali) によって構成され、一般的には宗教 (イスラーム教) や言語 (ソマリ語) の違いはほとんどないと考えられている。しかし、その当初から、ソマリア南部に置かれた首都モガデシュ (Mogadishu) に重要機関の大半が集中したこともあり、ソマリア北部地域は周辺化されるようになった。

また、ソマリ人の内部は複数のクランに分かれているが、独立当初から政治家たちは自らのクランを支持基盤として政治運営を行うようになった。とりわけ、シアード・バーレ (Mohamed Siyad Barre) 政権期 (1969年～1991年) にはこの傾向が強まり、バーレは周囲を繋ぎの強いクランで固めるのと同時に、周辺化されたクラン同士が結びついて反対勢力を形成しないように、クラン間関係の操作を行った<sup>4</sup>。

この結果、ソマリア北部地域で多数派を占めるイサック (Isaq) というクランの周辺化が進み、彼らはバーレ政権を打倒するために1981年にロンドンにてソマリ国民運動 (Somali National Movement: 以下、SNM) という勢力を結成し、武力闘争を開始したのである。これに対して、バーレ政権側はソマリア北部地域への武力攻撃を行い、その際にも同地域内のクラン関係を操作して相互に敵対関係を煽りつつ、逮捕や殺戮を無差別に繰り返したため、1980年代末にはソマリア北部地域が戦場と化した。最終的にはSNMがソマリア北部地域からバーレ勢力を駆逐し、その地域内にいるクランの長老によって行われた話し合いの結果、1991年5月18日にソマリランドとして独立することが宣言されるに至った<sup>5</sup>。

この紛争により、北部地域最大の都市であったハルゲイサ (Hargeisa) を始めとして各都市は破壊され、多くの人々が難民となり隣国のエチオピアへ逃れた。また、それ以前から留学や出稼ぎにより主にアラブ諸国や西洋諸国で生活していた人々の大半も帰国することが困難になり、難民となったのである。本稿では、このように紛争が主たる原因となって出身地を離れざるを得なくなった人々や帰れなくなった人々、そして、その子ども世代をディアスポラと呼ぶこととする。

## (2) 先行研究における本稿の位置付け

本稿は、ディアスポラの動向をソマリランドの開発や政治に結び付けて考察を行う。この背景には、既存の研究が持つ分析視角では、ソマリランドの国外にいるディアスポラとソマリランドとの間で越境的に展開されている重要なダイナミズムを見落としてしまうことへの問題意識がある。先行研究の分析視角とは、ソマリランドの国内のみに目を向け、とりわけクラン長老の役割を無批判に注目し、重視することである。

しばしば、ソマリランドは国際的な支援が行われているにもかかわらず紛争が継続しているソマリア南部と比較されながら、1990年代の和平交渉にクラン長老が中心的な役割を果たしたことや、2000年以降は長老がソマリランド議会の上院議員として政治に関わっていることが注目されてきた<sup>6</sup>。確かに、それらの研究のなかには、部分的には和平交渉にディアスポラが関わっていたことなどに触れているものがあるものの、あくまでも議論の中心は長老の役割に置かれてきた。しかし、近年の状況を鑑みると、もはやディアスポラは議論の片隅に置かれるのではなく、彼らを主要な考察対象とすることが求められる段階にあると考えられる。

近年、ディアスポラによるソマリランドへの送金は同国にとって主要な外貨獲得の源泉となっており、その資金力は目を見張るものがある。また、2010年にはソマリランド政府が同国の発展に対するディアスポラの貢献を促進させることを目的として、専門機関であるSDAを設立している。SDAの第1回年次会議のレポートには、「ディアスポラ・コミュニティは資金的にも心理的にも平和構築プロセスを支え、彼らの活動は和平イニシアティブに貢献してきた。ディアスポラの役割の重要性は自明である」と記されている。さらに、ソマリランド政府が作成した、2012年からの5年間を対象とする国家開発計画においても、ディアスポラの重要性が明記されている。

これらに加え、ソマリランドが1991年に独立を宣言して以降、現在に至るまで国際的には主権国家として認められて

いない未承認国家であることを鑑みると、彼らの動向を考察の対象とする必要性はより高まる<sup>7</sup>。しばしば、未承認国家については他国や国際機関からの援助がなされないという側面が取り上げられるが、主権国家との違いは援助の有無のみに止まらない。他国企業の進出や海外投資において障壁が高いだけではなく、自国のパスポートを用いて他国へ出稼ぎに行くことも困難であるために、経済的にも大きな問題を抱える傾向がある。実際に現在、ソマリランドの失業率は50%近くあり、なかでも人口の65%から70%を占める若者の75%が無職であることから、同国は経済的に非常に厳しい状況にある<sup>8</sup>。それゆえ、国内にいる人々の力のみでは「国」として存続し、発展していくことは極めて困難であると言える。

なお、近年では未承認国家の比較研究を行ったCaspersen [2012] によって、様々な制限を内包している未承認国家が存続している背景として、その外部主体（external actors）の存在が重要であることが論じられている。彼女の議論において、ソマリランドの外部主体としてはディアスポラの存在が指摘されている<sup>9</sup>。

したがって、従来のように分析の視座を国内のみに向け、クラン長老という主体を無批判に取り上げるのではなく、その国外をも視野に入れ、ディアスポラを考察の対象としていく必要があるのではないだろうか。本論では、筆者がディアスポラを対象に行った調査結果をもとにしながら、この問題について考えていきたい<sup>10</sup>。

### 3. 調査地、調査対象者、調査方法

本論で用いる主なデータは、2013年11月から12月にかけての1カ月半の間、イギリスの首都ロンドンにて行った聞き取り調査に基づくものである。上で述べたように、イギリスはソマリランドの宗主国であったこともあり、欧州諸国のなかではディアスポラの数が最も多いと言われている。他方で、現在ではソマリランドからのみではなくソマリア南部地域からも多くの人々がイギリスへ逃れているために、どのくらいの人々が同国に滞在しているのかについての正確な統計資料はなく、人口の規模を示すことは困難である。しかし、ソマリ人ディアスポラとしては9万5千人から25万人がイギリスに滞在し、なかでもロンドンの人口規模は最も大きいと考えられている<sup>11</sup>。

聞き取りの進め方は、芋づる式に聞き取り相手を紹介してもらうのと同時に、できる限りソマリ人社会の社交場であるソマリ・カフェに出入りしたり、ワークショップに参加するなどして情報収集に努めた。その結果、計21人に話を聞くことができた。聞き取り調査はほとんどの場合は個別に行い、1人当たり1時間から2時間ほどかけて行った。以下では、この調査結果を基にして考察を進めることとしたい。まずは、ソマリランドの開発との関係から見てみよう。

### 4. 考察

#### (1) ディアスポラと開発

ソマリランドの首都であるハルゲイサでは、ディアスポラによってホテルや病院、学校の建設が行われている。Hansen [2007]によると、ディアスポラの資金により多くのホテルが建設されており、それらはハルゲイサに住む人々にとって独立宣言後の平和と発展を象徴するものであり、ディアスポラがプライベートセクターのなかで効果的な役割を果たしているものの一つとなっている。また、ハルゲイサにある建築物の名前も「ハーフ・ロンドン」や「ニューヨーク」、「ベルリン」というように、ディアスポラによって建設されたことが象徴されている名前が付けられるようになっていることが指摘されている<sup>12</sup>。

同様に、ディアスポラによって多数の学校や病院が建設され、教育や医療へのアクセスも改善されるようになっている。例えば、ハルゲイサ大学（University of Hargeisa）はディアスポラによる資金によって設立され、図書館の蔵書も彼らから送られた本により幅広い学術分野をカバーするものになっている<sup>13</sup>。

他方で、ソマリランドが未承認国家であることもあり、ソマリランドの大学の学位を持っていたとしても正式には学位の証明にならないという問題も生じている<sup>14</sup>。それゆえ、もちろんディアスポラによるソマリランドへの投資や開発に全く問題がないわけではないが、ソマリランドの開発においてディアスポラが果たしている役割は大きい。実際に、ソマリランドに病院を建設するためにファンドレイジングをしている女性Aはディアスポラの役割について次のように話した。

「政府を見てみてください。彼らの大多数はディアスポラからです。教育者もディアスポラから。他の国に行けば、自分の国とはたくさんの点で異なる経験をします。その経験は利用することができます。イノベーションにおいても創造性においても、何においてもです。それはとても大きなインパクトを与えることができます。ディアスポラからの人々は開発において大きなインパクトを与えることができます。ソマリランドだけではなく、アフリカの角全体に対してです。財政的にも、ビジネスの面でも、教育を通じてでも、多くの側面においてです」<sup>15</sup>。

ディアスポラがソマリランドの政治家になっていることについては以下で述べるが、この女性Aの言葉に象徴されているように、ディアスポラはソマリランドの開発において不可欠な存在となっている。これは、ソマリランド政府が自ら主導する開発事業にディアスポラを動員しようとしていることから明らかである。

というのも、これまでソマリランドにおけるホテルや福祉施設の建設はディアスポラによって私的に行われてきた傾向があったが、現在ではソマリランド政府が主導する道路建設事業が進められている。政府はブラオ（Bruo）からエルガボ（Erigavo）という地域を結ぶ375kmに及ぶ道路を建設するための資金を、ディアスポラを動員することによって集めようとしているのである。

筆者がロンドンにて調査をしている際には、この道路建設の資金を集めるため、ソマリランドの防衛大臣などの閣僚や、ロンドンにある「ソマリランド大使館（Somaliland Mission UK）」の大使<sup>16</sup>が出席する大規模なファンドレイズ集会がロンドン東部にて開催された。このファンドレイズ集会は政府のイニシアティブであるが、当日の司会進行などの運営は17人のディアスポラに任されていた。ソマリランドへもテレビの生中継がされたこの集会には、ロンドンからだけではなく、カーディフ（Cardiff）やシェフィールド（Sheffield）からもディアスポラが参加し、最終的にこの日だけで個人や企業からの寄付金として併せて50万ポンドの支払いが約束された<sup>17</sup>。なお、この道路建設のために寄付された金額は寄付者の名前と共に、専用サイト<sup>18</sup>にて確認することができるようになっている。約束した寄付金の額と実際に支払われた金額、さらに支払った金額でどのくらいの距離の道路が建設されるのかが、ソマリランドの国内外を問わずに確認できるシステムが採用されているのである。これにより、ディアスポラはいつでも自分の寄付金がどのように使われたのかを確認することができる<sup>19</sup>。

では、なぜディアスポラはソマリランドの開発事業へ多くの投資をするのだろうか。この点について、このファンドレイズ集会を運営していたメンバーの一人の女性Bは次のように話した。

「ソマリランド・ディアスポラはとてもユニークだと思います。開発に関しては全てのことをやります。とてもたくさんのことをするのです。ソマリランドが承認されていないので、政府はインフラを整備する資金がないのです。そして人々は自分達でやるという哲学を身に着けました。誰も助けてくれないのです。ただ自分達でやるだけです。全ての小さなコミュニティが自分達の道路を自分達でつくっています。イニシアティブを自分達で取っているのです」<sup>20</sup>。

もちろん、彼女の意見だけをディアスポラに代表的な意見だとは言えないが、実際に、このファンドレイズ集会の一週間後には、政府によるものではなく一つのコミュニティが主催した別の道路建設のファンドレイズ集会がロンドン西部にて開催された。ロンドンではソマリランド各地の開発のためのファンドレイズ集会がどのくらいの頻度で行われてい

るのかについては確かではないが、ディアスポラはソマリランドの開発に取り組み、その発展と密接に結びついていることは、道路建設事業において政府が彼らを動員していることを鑑みても明らかだろう。

## (2) ディアスポラとソマリランド政治

前節で女性Aが述べていたように、ソマリランドではディアスポラが政治家となる傾向が顕著になっている。現在のシラーニョ（Ahmed Mohamed Mohamud “Silanyo”）大統領はイギリスからであり、外務大臣や防衛大臣などの閣僚や下院議員の約半数がディアスポラによって占められている。また、野党である正義福祉党（the Justice and Welfare Party、*Uruka Cadaaladda iyo Darryeelka*：以下、UCID）のリーダー、さらに同じく野党であるソマリランド国民党（Somaliland National Party、*Wadani*：以下、Wadani）のリーダーであり、同時に下院議長を務めている人物も同様である。ソマリランドの政治にディアスポラが進出しているとも言える状況が発生しているのである。

実際に、調査を進めるなかでソマリランドの各政党がロンドンでも活動を展開していることが見えてきたのであるが、その前に簡単にソマリランドの政治システムについて述べておきたい。ソマリランドは1991年に独立宣言をし、その後もクラン長老による話し合いが繰り返されてきた結果、2001年の国民投票によって独自の憲法が承認され、2002年からは選挙によって議員や大統領が選出されるようになっている。

ソマリランドでは憲法規定により、地方選挙によって得票数の多い上位三党が決定され、この3政党のみが下院選挙および大統領選挙を争う権利を獲得することができるようになっている<sup>21</sup>。2002年以降、ソマリランドでは5回の選挙が行われ<sup>22</sup>、2010年の大統領選挙ではそれまで政権を握ってきた統一民主人民党（United Democratic People's Party、*Uruka Domuqraadiga Ummadaha Bahoobay*：以下、UDUB）からクルミエ（Kulmiye Peace, Unity and Development、*Kulmiye Nabad Midnimo iyo Horumar*：以下、Kulmiye）へと政権が交代され、シラーニョが大統領に就任した。なお、現在は2012年に行われた地方選挙の結果、与党であるKulmiyeに加え、野党として上述のUCIDとWadaniが国政に参加する権利を持つ政党となっている。

今回の調査では、ディアスポラのなかにこれらの政党の党员や支持者がおり、各地に支部を持っていることが明らかになった。イギリス国内に議長を頂点とする組織が形成され、下部組織として各地の党员（member）による委員会が設置されており、この委員会メンバーによってさらなる党员および支持者（supporter）の獲得やファンドレイズ集会が行われているのである。このように、各政党の構成員は党员と支持者に分かれおり、党员になると毎月の党費（15ポンド～20ポンド）を支払うことが義務付けられるのと同時に、選挙に出馬する権利を獲得することができる。党費の金額は党员の居場所がソマリランド国内外の違いによって異なることはない。これに対して、支持者とは党費の支払いなどは発生していないが、各政党员が実施するファンドレイズ集会などに参加し、献金を行ったりする人々のことである。しかし、ソマリランドでは在外投票システムは採用されていないために、両者はいずれもロンドンにいる限り投票する権利は持っていない。

これまで、ソマリランドで選挙が行われる際に、各政党は選挙資金を獲得するために頻繁にファンドレイズ集会を行ってきた。2010年のソマリランド大統領選挙にてKulmiyeが勝利して政権交代が起きた選挙の際に、同党の党员としてイギリスにてファンドレイズ集会を組織していた男性Aは、「Kulmiyeが政権を獲得することができたのはディアスポラのおかげです」<sup>23</sup>と話している。この男性によると、イギリスからだけでも200万ドルがファンドレイズ集会により集められたと言う。また、野党であるWadaniのイギリス支部の中心メンバーである男性Bも、選挙にて勝利を収めるためにはディアスポラから支持を獲得し、資金を集めることが何よりも重要であり、筆者がディアスポラの役割について尋ねたところ、「それは単純です。わたしたちはお金が必要なのです」<sup>24</sup>と端的に述べた。

なお、この支持者獲得の活動はソマリランドの選挙期間中に限ったことではなく、筆者が調査していた期間にもWadaniの西ロンドン支部が発足したり、同党のリーダーがブリストル（Bristol）を訪問して会合を開くなど、来年のソマリラン

ド選挙に備えた活動が行われていた。これらのことから、ディアスポラはソマリランドの政治にも関わりを持っていると言えよう。

### (3) ディアスポラとクラン

では、ディアスポラの各政党员はどのようにして党员や支持者を集めているのだろうか。これまでの研究では、ソマリランドの国内のクラン長老の役割が重視されてきたが、その背景にはソマリランドにおけるクラン関係の仕組みがあるためである。既述のように、ソマリ人社会の内部はクランという集団に分かれ、その内部はさらにサブ・クランやサブサブ・クランに分かれており、クラン内やクラン間で対立が生じた場合には、長老による話し合いにより対応がなされ、秩序が維持されてきた<sup>25</sup>。

このソマリ人社会の特徴について、植民地時代にソマリ人社会を調査した人類学者であるルイス (I.M. Lewis) は著書の題名にもなっている『パストラル・デモクラシー (*A Pastoral Democracy*)』という言葉を用いて、統治機関としての国家を持たない状況においても話し合いにより秩序を維持する独自のデモクラシーがソマリ人社会に存在していると結論付けている<sup>26</sup>。ソマリ人社会において、クラン関係は非常に重要な位置を占めているのである。バーレ政権下ではこのクラン関係が意図的に操作され、各クラン間での対立が煽られたのである。それゆえ、現在でもソマリランド内では、各クランの間には緊張関係があると考えられている<sup>27</sup>。

そして、このクラン間の関係は選挙での投票とも無関係ではなく、投票の際にはそれぞれの政党が特定のクランを支持基盤として動員を行っている側面がある<sup>28</sup>。この点について、ディアスポラの場合はどうなっているのだろうか。

もちろん、各政党员は自らが特定のクランに基づいているとは言及しない。今回の調査では、各政党の党员や支持者の計8人に対して政党の支持基盤について質問したが、いずれも自らの政党が特定のクランを支持基盤にしていることを否定している。例えば、Wadaniの党员である男性Cは次のように述べている。

「部族を基盤にはしていません。第一議長と第二議長は違うクランであり、書記長はまた別の地域からです。これをどう説明できますか。Kulmiyeですらそうではないと言えます。私はその考えを全面的に否定しています。デモクラシーを建設する必要があるからです。デモクラシーなら議論しやすいのです。私たちは部族に依存していましたが、部族は過去のもので。部族は1991年に終わったのです。私たちが政府を設立した時に」<sup>29</sup>。

他方で、どの政党の活動にも関与していない人々のなかには、各政党間に政策やイデオロギー的な違いはなく、異なるのはクランだけであると述べ、ディアスポラの間でもクラン関係に基づいて動員が行われている側面があることを述べている。例えば、自分の属するクランに基づいて特定の政党からしばしばファンドレイズ集会の連絡があることや、政党が各個人の自宅を直接訪問し、政党名とクラン名を告げることによってのみ献金活動が行われているという。

クラン関係はソマリランド国内だけの問題ではなく、ディアスポラに対してもクラン関係に基づいた動員が行われている側面があると言えよう。しかし、クラン関係については、紛争によって出身地を離れたディアスポラにとっても敏感な問題であるために、今回の調査ではあまり踏み込んだ質問をすることは憚られた。

また、ディアスポラにとってもクランの違いが意識されていることは、ディアスポラ内部での協力関係を難しくしている側面にも影響を及ぼしていると考えられる。筆者は今回の調査において、ロンドンやイギリスにいるディアスポラを代表するような組織を探していたが、最終的には確固たる団体を見つけることができなかった。この点について、ソマリランドの開発に関わる20代前半の女性Cは次のように述べた。

「全てのソマリランダーを代表する人はいません。それはこれから作っていく必要があるかもしれませんが、今の

段階ではありません。とても多様ですし、分散しています。……人々の間ではたくさんの違いがあります。代表的な団体をつくるには、たくさんの違う団体を集めなければなりません。統一しなければいけません。しかし、人々のなかにはバックホムのメンタリティで動いている人がいます。不幸なことです。クランが組織を作ることについて問題だとは思いますが、それらの違いを統一するのはとても難しいのです。なので、全員を一つにまとめることはとても難しいことなのです」30。

ここで彼女が「バックホムのメンタリティ」と言っているのは、クラン関係を重視して物事を進めることを意味している。1980年代に激化した紛争により出身地を離れた彼女の親の世代は、クラン関係に基づいて生活をし、どの政党を支持するのかに際してもクラン関係が基準にされている傾向があると彼女は説明した。もちろん、クラン関係のみを強調してあらゆることを説明するのは全く以て妥当ではないが、ソマリランドの国外においても国内で展開されているクラン関係は無関係であるわけではないのである。

#### (4) ディアスポラとソマリランダー

他方、ディアスポラのなかにはソマリランド・ディアスポラをまとめていこうとする動きがあることも確かであり、自らの存在を可視化しようとする試みも図られている。その一つが、先ほどの女性Cの引用のなかにも含まれていた、「ソマリランダー (Somalilander: ソマリランド人)」という言葉を用いて自らのアイデンティティを示すことである。

上述のように、イギリスにはソマリランドのディアスポラだけではなく、ソマリア南部から来た多くのディアスポラも生活している。彼らはエスニシティとしてはソマリ人であり、言葉もソマリ語であることから、一見すると誰がソマリランドからなのか、誰がソマリア南部から来ているのかは容易には見分けられない。これは彼らソマリ人にとっても同じであり、彼ら自身も外見だけでは出身地を見分けることはできないと話していた。このような環境において、自らを「ソマリランダー」であると自称することは、他のソマリ人ディアスポラと差異化を図ることに結びつく。先ほどの女性Cは、ソマリランドにいる時は当該国が国際的に承認されていないことを忘れるが、ロンドンではそうではなく、自分達の存在を主張していく必要を強く感じるために、ソマリランダーであることを強調すると述べていた。

また、毎年ソマリランドの独立記念日である5月18日にはロンドンでソマリランドの国家承認を求める集会が行われているが、この集会を主導しているメンバーのうちの一人の男性Dは、ロンドン西部にてソマリランドのコミュニティ団体 (West London Somaliland Community: WLSC) を率いている人物である。この建物の正面入り口にはソマリランドの旗が記されており、部屋のなかにも同様にソマリランドの旗が掲げられている。この団体はコーランや英語の授業、そして他にも福祉サービスを提供しており、その利用者もソマリランダーだけに限定しているわけではない。しかし、団体のリーダーである男性Dは、イギリスにおいてソマリランダーの存在を可視化し、人々を一つにまとめるために団体を設立したと話し、次のように述べた。

「イギリスも含めてこの世界では、ソマリ人という言葉はソマリアと結びついています。しかし、ソマリ人はエスニック・アイデンティティであり、ソマリ人のなかでは異なるナショナリティを持つことができるのです。ソマリ・エチオピア人のように。エチオピアはエチオピア連邦のなかに、ソマリ人の地域があります。これはケニアでも同じです。ジブチでもそうです。一方で、国際社会ではソマリ人はいつもソマリアと結び付けて使われています。イギリスでもそうです。もし、『イギリスのソマリ人』というようにグーグルで検索すると、ソマリ人は元々ソマリアから来たという説明がなされています。他方で、数千人の人々がケニアやエチオピアやジブチから来ています。なので、私たちは私たちの存在について、そしてソマリ人の間の違いについて人々に知らせるためにこの団体を設立しました」31。

また、この男性はヨーロッパにいたソマリランド・ディアスポラの統一を呼びかけ、ネットワークを強化しようとしているソマリランド・ソサイエティ・ヨーロッパ（Somaliland Society in Europe）というグループにおいて中心的な役割も果たしている。このグループは年に一度、ヨーロッパ諸国のなかの一国に集まり、ソマリランドやディアスポラが抱えている問題について話し合う機会を設けており、各国にいたソマリランド・ディアスポラをつなげる場となっている。

確かに、上で述べたように現時点においてはソマリランドのディアスポラを代表するような組織を確認することはできていないが、ソマリランドの国外にてソマリランドの人々をまとめ、ソマリランダーとしてのアイデンティティを強調することにより国際社会に対して自らの存在を主張し、国家としての承認を求めるナショナリズムとも言える活動が展開されている。ソマリランドの開発や政治にディアスポラが一定の存在感を発揮していることを鑑みれば、この活動が今後どのような展開を見せるのかを注視していく必要があるだろう。

## 5. まとめ——ソマリランドのバックボーンとして

このように、ソマリランドの国内、とりわけクランの長老に焦点を当ててきた既存の研究では見落とされてきたディアスポラは、ソマリランドの開発や政治と繋がり、他のソマリ人との差異化を図ることを通してナショナリズムを生み出そうとし、国家承認を求める活動も展開している。

しかし、ディアスポラは必ずしもこれらの兆候を楽観視しているわけではない。なかでも、ディアスポラによるソマリランド政治への進出については、その影響力を懸念する意見もある。ディアスポラが資金力を利用して特定のクランから票を買収するなどしてクラン間関係を利用し、対立を助長するような動きがあることや、政治家になったディアスポラがその土地固有の問題を把握できていないことなどがディアスポラ自身によって指摘された。例えば、ソマリランダーとしてのアイデンティティを強調する先述の20代前半の女性Cは、現在のソマリランド政治について次のように話した。

「……ソマリランドの政治はディアスポラから資金が提供され、ディアスポラから運営され、ほとんどディアスポラのために行われています。ディアスポラからソマリランドへではなく、ソマリランドからソマリランドへとすべきだと思うのです。そうすべきです。なぜなら、彼らは国の問題をより理解しています。私たちはお金を持っていますし、パスポートを持っています。そしていわゆる西洋の知識も持っています。どうすれば良いのかは分かりませんが、とてもディアスポラに占領されていると思います」<sup>32</sup>。

他方で、各政党の党員や支持者は、ソマリランドの政治を発展させるためにディアスポラの関与が必要であることを訴えている。野党であるUCID党員の男性Eは、ロンドンで学業を修めたことを理由に、自らがソマリランドの政治に進出していく必要があることを訴えていた。同様に、与党であるKulmiye支持者の男性Fも、「Kulmiyeに限らず、全ての政党は良い教育を受けた人々をディアスポラから必要としています。Kulmiyeはディアスポラから教育を受けた人々を獲得しているのです。大統領もマンチェスター大学を卒業して、ソマリランドの建国に関わりました」<sup>33</sup>と述べ、他国で高い教育を受けたディアスポラが各政党にとって必要不可欠であり、ディアスポラはソマリランドの政治に貢献する必要があることを主張していた。

現段階では、ディアスポラがソマリランドの政治に一定の存在感を発揮していることの是非について、ディアスポラにとっても一概に見極めることは難しい側面があり、上記のようにソマリランドの政治への進出をどのように捉えるのかについても意見が分かれているものの、いずれにしても自分達はソマリランドの「バックボーン」であり「ライフライン」であるということが、異なる意見を持つ人々の間でも共通していた。前節で紹介したWLSの男性Dは次のように話していた。

「ディアスポラは良い面と悪い面の両方があります。ディアスポラはソマリランド社会のバックボーンなのです。もし、ディアスポラがいなければソマリランドは生き残っていきません。……彼らの多くが爆撃を生き延びた人々です。彼らは幸運にも生き残ることができ、多くの人々が湾岸諸国から戻ってきました。西洋諸国には人数は多くはありませんでしたが、彼らは家族への送金をしました。和解会議もディアスポラから資金提供されました。そうです、ディアスポラはバックボーンであり、ソマリランドの発展において効果的な影響を及ぼします。ただ同時に、もし配慮がなされなければ、自分達がソマリランドに悪影響を及ぼす可能性があります。そして、今のところ政治に参加しているソマリランダーは国の発展方法についてビジョンがなく、彼らの多くは活動家ではありません。しかし、クランとは良い繋がりを持っています。この方法ではディアスポラが悪影響をもたらしてしまいます」<sup>34</sup>。

確かに、ディアスポラがソマリランドに対してもたらす影響については注意深く議論する必要がある、それは必ずしもソマリランドの安定や発展に効果的な役割を果たすものばかりではないだろう。しかし、いずれにしてもディアスポラはソマリランドという未承認国家にとって必要不可欠な生命線となりつつあることを踏まえた研究が必要になっているのではないだろうか。従来のように、ソマリランドの国内にいるクラン長老の役割だけを見ていては、国境を越えて展開される重要なダイナミズムを見落としてしまう危険性がある。

## 6. おわりに

本稿は、ソマリランドの国内にいるクラン長老のみを暗黙裡に重視し、考察の中心に置いてきたこれまでの議論に対して、国外にいるディアスポラを考察の対象とすることにより、従来の議論では捉えきれない越境的なダイナミズムが展開されていることを示してきた。ディアスポラはその資金力を背景としてソマリランドの開発を支え、各政党とも繋がりを持っているだけではなく、アイデンティティとの関わりからナショナリズムや国際的な国家承認活動にも従事している。なお、国家承認のロビーイングについては、筆者が調査を終了した後の2014年4月に、シェフィールド市議会によってソマリランドの国家承認を認める採択がなされている。

ディアスポラは、彼ら自身が認識しているように未承認国家であるソマリランドの「バックボーン」や「ライフライン」となりつつあると考えられる。そして、これらのダイナミズムはソマリランドの国内、なかでも従来の議論で対象とされてきたクラン長老に着目するだけでは捉えることができないものである。もちろん、本稿はディアスポラにさえ注目していれば十分であるという立場ではなく、国内で起きている出来事や主体についても軽視すべきだというものではない。むしろ、両者の繋がりや関係性を考慮した議論が求められているということを提起するものである。

なお、本稿では敢えて「国内」と「国外」という言葉を用いて議論を進めてきたが、この区別の妥当性については別途検討の余地があるように思われる。ソマリランドの「国内」政治を見てみても、元々はディアスポラであった人物がソマリランドの政治家になっている。もはや、ディアスポラはソマリランドの「国外」のみにいるとは限らないのである。政府が主導して進めている道路建設のファンドレイジング集会を運営していた先述の女性Bは、ディアスポラの重要性を強調する一方で、矛盾するようであるが次のようにソマリランドにはディアスポラはいないとも話していた。

「……人権でも開発でも政治でも、どの分野でも……私はソマリランドにユニークなことは、どこにもディアスポラがないということだと思います。内側にも外側にもです。私たちは皆一緒です。1988年の時点においてハルゲイサは空っぽでした。なので、全てのソマリランドの人々はかつてはディアスポラだったということです。ハルゲイサは1988年には空っぽだったのです。ある人はキャンプにいて、6カ月後に戻ってきました。他の人はエチオピアに2年間いて、戻ってきました。他の人はヨーロッパにより長く住んでいましたが、10年後に戻りました」<sup>35</sup>。

このような意見からも、ディアスポラを単純にソマリランドの「国外」にいる人々として捉えることについては引き続き検討の余地が残されている。ソマリランドが未承認国家であるために、そのパスポートは国際的には有効ではなく、他国のパスポートを持たない限り移動が著しく制限されていることを鑑みると、なおさら検討すべき論点である<sup>36</sup>。この意味において、未承認国家を支える外部主体としてディアスポラを捉えている先述のCaspersen [2012]の議論にも限界があると考えられる。

したがって、今後は未承認国家であるソマリランドの「国内」および「国外」というそれぞれの「場所」で起きている出来事に関連性を見出しつつも、「人々」の移動性という点を考慮しながら、さらなる調査と理論的な検討を進めることにより議論を深めていきたい。

- 1 この人数は、ソマリランド政府のホームページ[<http://somalilandgov.com/>]および同政府が発行した開発計画書(National Development Plan:NDP)を参考にしたものである。他の論者によれば人口の半数以上が当該国の外側に滞在しているとも言われている(Hansen, P., "Revolving Returnees in Somaliland," in Sørensen, N.N., ed. *Living Across Worlds: Diaspora, Development and Transnational Engagement*, Geneva: International Organization for Migration, 2007, pp. 129-150)。なお、本稿にてソマリランドの領域とは、本論でも述べるように旧イギリス領に該当する地域を指示しているが、ソマリランド東部に位置する2つの地域(SoolおよびSanaag)については、ブントランド(ソマリア北東部の自治地域)との間で領土問題がある。
- 2 ディアスポラという言葉は、ブルーベーカー・ロジャーズ『『ディアスポラ』のディアスポラ』白杵陽監修、赤尾光春・早尾貴紀編『ディアスポラから世界を読むー離散を架橋するために』明石書店、2009年、375～400頁によって、近年では極めて多義的に用いられていることや、実体(entity)として捉えることなどの問題点が指摘されていることもあり、その使用については一定の注意を払う必要があるが、本稿では本論でも示すように、紛争が主たる原因となって出身地を離れざるを得なくなった人々や帰れなくなった人々や、その子ども世代を示す言葉として用いることとし、ブルーベーカーが指摘する集団主義の問題へは今後の課題として対応していくこととする。なお、今回の調査にて筆者が聞き取りを行った人々の間では、英語の「ディアスポラ」という言葉は一般的に用いられており、ソマリ語では国の外側にいる人々を大まかに示す言葉である「コルバチョーク: qurbe-joog」という単語が、ディアスポラに相当する言葉として用いられていた。
- 3 旧イギリス領は1960年6月26日に独立をしたが、その5日後の7月1日に同領域は旧イタリア領と共にソマリアという一つの国として独立したことになる。しかし、7月1日の独立を巡っては、両者の間に正式な合意(Act of Union)が取り交わされていないとして、ソマリランド独立派はそもそも一つの国ではなかったことを主張し、同国独立の正当性／正統性を訴えている。
- 4 ソマリ人についてや(厳密にはその内部でも遊牧系と農耕系では言葉が異なるなどの違いがある)、植民地期の歴史、北部の周辺化およびバーレ政権によるクラン関係の操作についてはLewis, I.M., *A Modern History of the Somali: Revised, Updated and Expanded*, Oxford: James Curry Ltd., 2002やBradbury, M., *Becoming Somaliland*, Indiana: Indiana University Press, 2008が詳しい。なお、ソマリ人は現在のソマリランドやソマリア南部のみならず、エチオピアのオガデン地域、ケニア北部、およびジブチを居住地域としている。
- 5 当時の紛争の様子については、Africa Watch, *Somalia: A Government at War with Its Own People: Testimonies about the Killing and Conflict in the North*, New York: the Africa Watch Committee, 1990にて人々の証言を基にしながら詳細に示されている。また、1990年代に行われたクラン長老間の和平交渉についてはAcademy for Peace and Development (APD), *Peace in Somaliland: an Indigenous Approach to State-Building*, Hargeisa: APD, 2008が詳しい。
- 6 研究機関の報告書や学術雑誌への投稿論文としては、APD, op. cit. supra note 5; Hoehne, M., "No Easy Way Out: Traditional Authorities in Somaliland and the Limits of Hybrid Political Orders," DIIS Working Paper 2011: 18, Copenhagen: DIIS, 2011; Hoehne, M., "Limits of Hybrid Political Orders: the Case of Somaliland," *Journal of Eastern African Studies*, 7(2), 2013, pp. 199-217; Kaplan, S., "The Remarkable Story of Somaliland," *Journal of Democracy*, 19(3), 2008, pp. 143-157; Ridout, T. A., "Building Peace and the State in Somaliland: The Factors of Success," *The Journal of the Middle East and Africa*, 3(2), 2012, pp. 136-156などがある。また、著作としては上述のLewis, op. cit. supra note 4; Bradbury, op. cit. supra note 4

などがあり、近年では国家建設におけるクラン長老の役割について再検討したものとして、Renders, M., *Consider Somaliland: State-Building with Traditional Leaders and Institutions*, Leiden: Brill, 2012がある。

- 7 未承認国家の定義として、本論でも参照しているCaspersen, N., *Unrecognized States: The Struggle for Sovereignty in the Modern International System*, Cambridge: Polity Press, 2012の議論に基づく、次の5つを挙げることができる。①事実上の独立を達成していること（主要な都市や地域を含めて領土の3分の2以上をカバーしている）、②リーダーがさらなる制度の設立を目指し、レジティマシーを示していること、③正式に独立を宣言していること（国民投票を実施したり、独自の通貨を採用していることなど）、④国際的に承認されていないこと、⑤少なくとも2年以上は存続していることである。
- 8 Regional Mixed Migration Secretariat and International Migration Institute, *Global Migration Futures: Using scenarios to explore future migration in the Horn of Africa & Yemen*, Project report, RMMS and IMI, 2012.
- 9 未承認国家の存続を支える外部主体として、パトロン国家 (patron states)、ディアスポラ、親国家 (parent states) の3つが挙げられている。なお、本論でも述べているようにCaspersenの議論ではソマリランドについてはディアスポラの存在が指摘されているものの、詳細な検討はなされていない。
- 10 ソマリランドやソマリアという国名の区別を抜きにした場合、つまり一般的に「ソマリ人ディアスポラ」とした場合には、各家族内で越境的に行われる送金については従来の研究にて論じられてきた（例えば、Hammond, L., "Obliged to Give: Remittances and the Maintenance of Transnational Networks Between Somalis at Home and Abroad," *Bildhaan: An International Journal of Somali Studies*: Vol. 10, Article 11, 2010, pp. 125-151やLindley, A., "The Early Morning Phone Call: Remittances From a Refugee Perspective," *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 35(8), 2009, pp. 1315-1334などがある）。この背景には、1980年代末には現在のソマリランドの地域が紛争地となったが、それ以降は旧イタリア領であるソマリア南部で紛争が激化したことにより、さらに多くの人々が出身地を離れざるを得なくなり、ディアスポラとなったという理由がある。これらの議論と本稿の違いは、分析の対象をソマリランドに限定し、分析レベルを個人や各家族ではなく、国家レベルに設定していることである。
- 11 ソマリ人がイギリスに滞在するようになった経緯や人数の推移などについては、Hammond, L., "Somali Transnational Activism and Integration in the UK: Mutually Supporting Strategies," *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 39(6), 2013, pp. 1001-1017; UNDP, *Cash and Compassion: The Role of the Somali Diaspora in Relief, Development and Peace-Building*, UNDP, 2011; 遠藤貢「ソマリ人ディアスポラと崩壊国家」川端正久・落合雄彦編『アフリカと世界』晃洋書房、2012年、385～405頁に詳しく記載されている。また、本稿ではソマリランドのディアスポラを対象とするものの、この人数については不明であり、あくまでもソマリ人ディアスポラとしての人数を提示するに止まる。
- 12 Hansen, op. cit. supra note 1.
- 13 UNDP, op. cit. supra note 11.
- 14 筆者によるインタビュー（2013年11月26日）より。
- 15 筆者によるインタビュー（2013年11月26日）より。
- 16 ソマリランドは未承認国家であるため、正式には大使館とは呼べるものではないが、機能としてはビザの発行をするなど大使館の役割を果たしている。
- 17 この金額は筆者によるインタビュー（2013年11月20日）に基づいている。約束された支払額 (pledge) とはファンドレイジングの会場にて配布される専用の用紙に記載されたものである。この用紙には、名前と携帯番号、支払う金額が記載され、後日に記載した金額を支払うシステムになっている。また、この集会では現金でも寄付が募られ、その額は10万ポンド程になったと言う。なお、この道路建設のためのファンドレイズ集会はロンドンに限らず、イギリスの他の都市や他国でも開催されている。
- 18 Road Development Agency [<http://somalilandroads.com/>].
- 19 なお、現段階では主にソマリランド「国内」の寄付者の名前と金額が掲示されている。
- 20 筆者によるインタビュー（2013年11月20日）より。
- 21 特定のクラン（氏族）や地域を基盤として無数に政党が発足することを防止するために、憲法9条にて政党数は3党までに限定されている。なお、ソマリランドの議会は二院制となっており、クラン長老によって構成される上院には選挙がないが、下院は選挙によって議員を選出するシステムとなっている。
- 22 内訳は地方選挙が2回、大統領選挙が2回、議会選挙が1回となっている。
- 23 筆者によるインタビュー（2013年12月2日）より。

- 24 筆者によるインタビュー（2013年12月11日）より。
- 25 クラン関係に基づく秩序維持の方法については Le Sage, A., *Stateless Justice in Somalia: Formal and Informal Rule of Law Initiatives*, Geneva: Center for Humanitarian Dialogue, 2005が詳しい。
- 26 Lewis, I. M., *A Pastoral Democracy: A Study of Pastoralism and Politics among the Northern Somali of the Horn of Africa*, Oxford: James Currey, 3rd ed., 1999.
- 27 例えば、先述のように反バーレ政権を掲げてイサックというクランはSNMを結成したが、ガダプシ（Gadabursi）というソマリランド内の他のクランはバーレ政権側の勢力としてSNMと敵対関係にあった。
- 28 Progressio, *Swerves on the Road*, London: Progressio, 2012.
- 29 筆者によるインタビュー（2013年11月19日）より。なお、ここで部族とは英語表記のtribeを訳したものである。今回の調査期間中、この男性に限らず、他のインタビューイもクランの同義語としてこの言葉を用いていた。また、ここで男性が地域について言及しているのは、ソマリランドではクランごとに居住地域が分かれているためである。
- 30 筆者によるインタビュー（2013年11月30日）より。
- 31 筆者によるインタビュー（2013年11月20日）より。
- 32 筆者によるインタビュー（2013年11月30日）より。
- 33 筆者によるインタビュー（2013年11月19日）より。
- 34 筆者によるインタビュー（2013年11月20日）より。なお、和解会議とは1990年代にクランの長老間で行われたものを意味しており、活動家とはソマリランドの国家承認を獲得するためにロビー活動を行っている人物のことを示している。
- 35 筆者によるインタビュー（2013年11月20日）より。
- 36 実際に、ソマリランドでは他国のパスポートを持たない人々が国外脱出を図り（タハリブ：tahariib と呼ばれる）、その多くが命を落としていることが社会問題となっている。